



0 200km

29 美濃の  
28 美濃の  
竹鼻

10 越前敦賀・  
その他北国

19 尼崎・西宮  
22 摂州(摂津) 三田

27 播州(播磨) 近辺

31 芸州(安芸) 備前・備中・備後

34 要石

23 品川・川崎・神奈川

20 日本一高山富士

18 蒲原・吉原

16 袋井・掛川・金谷・藤枝

府中・江尻・興津

15 東海道小夜の中山

17 日坂

32 東海道鳴海

11 尾州(尾張) 名古屋

30 伊勢 志州(志摩) 鳥羽

14 宮・桑名

13 京・木津・奈良・大津

2 大阪

3 京町堀

7 大黒橋・亀井橋

8 清水・天王寺・玉造

36 上町

21 阿波・讃岐・土佐

江戸

24 三芝居

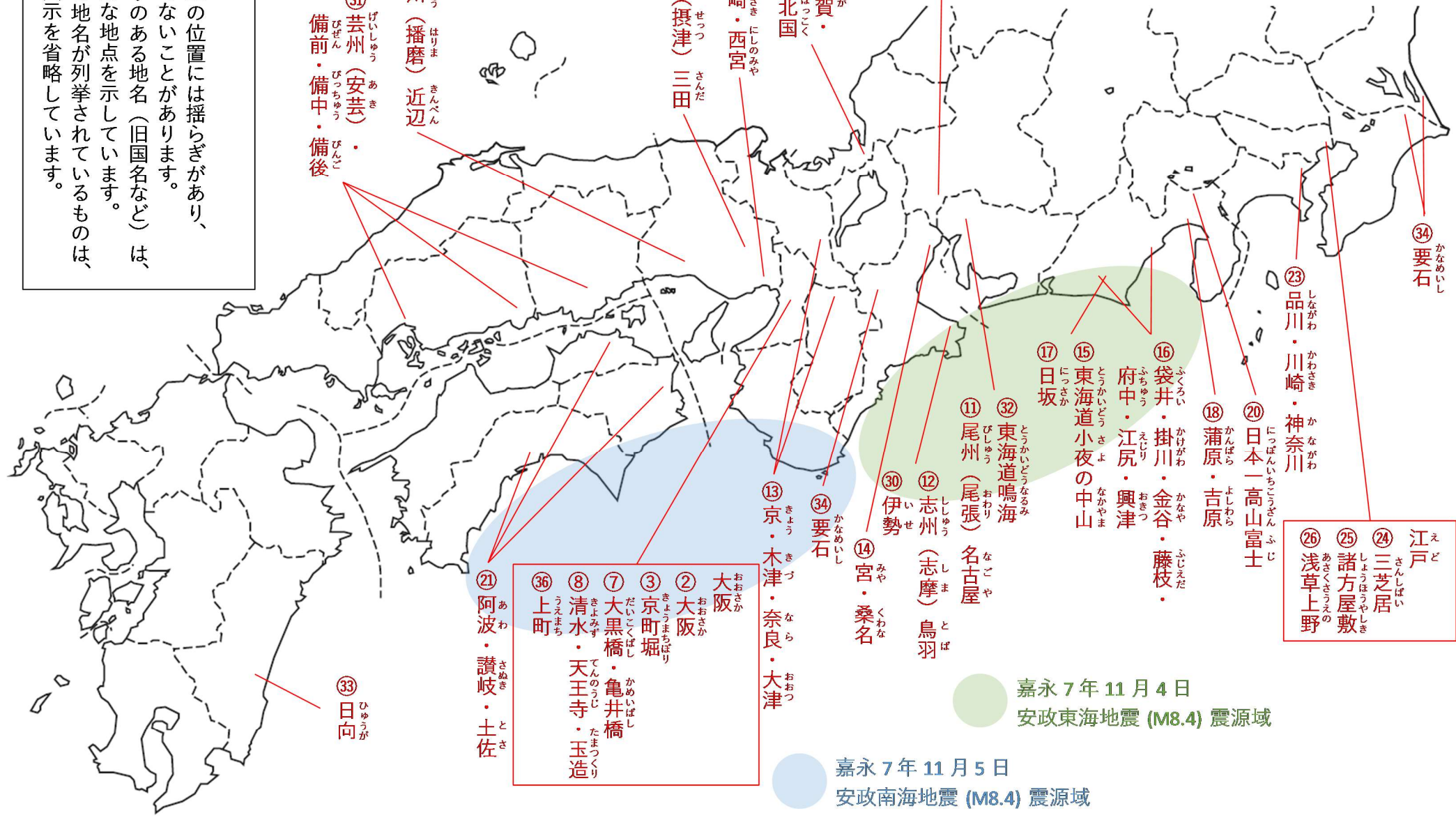
25 諸方屋敷

26 浅草上野

嘉永7年11月4日  
安政東海地震 (M8.4) 震源域

嘉永7年11月5日  
安政南海地震 (M8.4) 震源域

\*注意\*  
・地図上の位置には揺らぎがあり、正確でないことがあります。  
・広がりのある地名(旧国名など)は、代表的な地点を示しています。  
・複数の地名が列挙されているものは、一部図示を省略しています。



# 解説

## 地震研究と古文書

日本列島は四枚のプレートがぶつかり合う位置にあり、自然豊かな美しい国土を有する一方、古来よりたびたび大地震や津波、火山噴火などの災害に見舞われてきました。このことは、現在まで積み重ねられてきた古地震研究の成果により明らかです。古文書に書かれた内容から過去の地震について知ることは、古地震研究のもっとも基本的な方法のひとつです。

地震研究の立場からいえば、過去の地震を知るための手がかりとなりうるのは、文書記録のみにとどまりません。たとえば、掘削調査により過去の地震や津波の発生履歴を探ることができます。こうした地球科学的調査からは、数千年あるいはさらに以前の災害について客観的に知ることができません。一方、文書記録による情報には主観的な内容が含まれており、この点は注意を要します。しかし、これは逆に、災害によって人間社会が受けた被害や、それに対してどのような対応がなされたかを示すものであり、防災の観点からは非常に重要です。

滅災館で展示・解説している古文書・古典籍・絵図は、過去に日本列島で発生した災害について、先人が書きとめた貴重な記憶を今日に伝えるものです。「体験者」の記録から真摯に教訓を学び取り、今後の災害への備えを進めることが重要です。「諸国大地震大津波末代噺」は、直接的な体験を記録したものではありませんが、各地の被災状況をまとめて刊行された瓦版であり、こうしたものを通して当時の人々が遠方の情報を知りえたことが分かります。

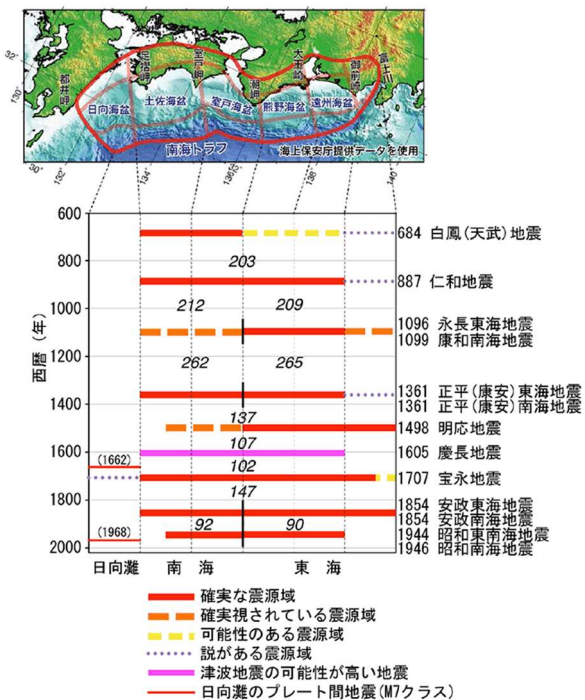
## 南海トラフ地震

西南日本の南方沖では、北上してきたフィリピン海プレートがユーラシアプレートの下へ沈み込んでいます。沈み込みが始まる位置では海底面が溝状にくぼんでおり、この地形は南海トラフと呼ばれています。南海トラフのプレート同士の境界面では岩盤にひずみが蓄積し、おおむね百年に一度、解放されます。これが南海トラフ地震であり、東海地震・東南海地震・南海地震などと呼ばれるものものの総称です。震源域（ひずみを解放する領域）は、一度の地震で駿河湾から四国沖までのすべてにわたる場合もあれば、東海域で地震が発生してしばらく後に南海域（四国沖）で地震が発生する場合もあり、メカニズムは複雑です。

古地震研究の成果として、図に示した地震が過去に南海トラフで発生してきたことが知られています。近い将来に再び南海トラフ巨大地震が発生すると考えられており、現在国を挙げて対策が進められているところとです。

### 安政東海・南海地震

嘉永七年十一月四日（西暦では1854年12月23日）に熊野灘から駿河湾にかけて、翌五日に紀伊水道から四国沖にかけての海域をそれぞれ震源域とする地震が発生しました。地震の規模を表すマグニチュードは、ともに



八・四と推定されています。この年の十一月二十七日に安政と改元されたので、これらの地震を安政東海地震・安政南海地震と呼びます。

安政東海地震では、箱根西麓から浜名湖付近の沿岸部で激しく揺れ、また地震に伴って発生した津波はサンフランシスコまでも到達しました。安政南海地震では、紀伊半島南部から四国南部にかけて激しい揺れに見舞われました。「稲むらの火」という、和歌山県の広村で浜口儀兵衛の尽力により津波での死者を減らすことができたという話は、この地震のときのものです。また、東日本大震災を受けて日本では十一月五日を「津波防災の日」と制定し、さらに国連総会でもこの日を「世界津波の日」と決めました。

### ⑦「大黒橋津波、亀井橋・其外落橋」について

安政南海地震・津波では、大阪の道頓堀川にかかる大黒橋や、木津川にかかる亀井橋などに、津波の遡上によって流された船がぶつかり、多くの橋が崩落しました。京セラドーム大阪の東側を流れる木津川にかかる大正橋のたもとに、「大地震両川口津浪記」の石碑があります。安政南海地震・津波の被害をうけて建立された供養碑です。津波で流された大型の船が大黒橋へ横付けになり、そこへ複数の船が次々に乗り上がって山のようになった様子や、「安治川橋、亀井橋、高橋、水分、黒金、日吉、汐見、幸、住吉、金屋橋等ことごとく崩れ落ち」といった被害の様子が2面に隙間なく描写されています。

〔前略、十一月四日の安政東海地震について触れた後〕十一月五日申刻（夕方）、再び大地震があり（※安政南海地震）、家が崩れ、火災も起き、恐ろしい様子であった。日暮れごろ雷のような轟音とともに海辺一帯に大波が押し寄せた。安治川と木津川は特に激しく、山のような大浪が立ち、両川筋に係留する船は碇綱が切れ、上流へ流されて橋へぶつかり、多くが崩落した。堀川から大通りへあふれる水に慌て逃げまどい、橋から落ちた人もいた。川沿いの懸造りの納屋などを大船が押し崩し、その音と人々の悲鳴は、あつという間のことだったので、助けることができなかつた。一四八年前の宝永四年十月四日の大地震（※宝永の南海トラフ地震）の際にも、地震の揺れを怖がって小船へ避難していたところ、津波がやってきて溺死した人が多かつたという。年月を隔てて、このことを伝え聞いて知る人が極めて少なくなつたため、今回また、同じ場所で宝



墨入れの様子

永時代と同じような大被害を出してしまつた。いたま敷（痛ましき）事限りなし。後年、また同じことが起きるかもしれない。（中略）津波の水の勢いは時々ある高汐とは異なつて極めて速いことは、今回経験した人たちはよくわかつたが、後世の人のため、また、犠牲になつた人の追善のため、ありのままを記す。どうか心ある人は、この石碑の文字がいつでも読みやすいように、墨を入れてほしい

現在でも、地域住民たちが碑文を墨汁でなぞり、常に読みやすく保つとともに、近年では毎年八月二十三日に法要が営まれています。